

《 アブハチ捕らずの水資源機構 》

＝隠蔽しきれない川上ダム直近の活断層＝

2008年10月2日

自然愛・環境問題研究所

代表・総括研究員 浅野隆彦

〔 はじめに 〕

水資源機構は、川上ダム建設所ホームページでく 9月21日に「川上ダム地質現地説明会」を開催しました(速報版)と、宣伝をしている。これは、淀川水系流域委員会第80回委員会審議を引き継ぐ資格のない「一方的な説明会」であり、「川上ダム地質問題の提起者」一行が出席していない「無効な現地検討会」であった。「問題提起者」一行は、「土砂災害の恐れが消えた」9月23日に現場に入り、「独自地質調査」を行い、その結果を委員会に報告し、9月26日付で委員会ホームページに一般意見書 NO. 1137 《 やっぱり活断層であった！ 》＝右岸鞍部南斜面の地表踏査＝を発表している。

「一方的な現地説明会」の中で「地中レーダ探査」を実施しているが、又しても「隠蔽・改竄」を行なっている。それを具体的に指摘しつつ、尚且つ、この「地中レーダ探査」そのものから「川上ダム直近、右岸鞍部を通る活断層」の存在が更に明確に成って来た事を報告するものである。

〔 右岸鞍部地中レーダ探査業務報告書 第3章以降の抜粋 〕

4. 調査結果と言うものから示す。如何に欺瞞かは最後に説明をする。

4. 調査結果

図 4.1 に測線Aの反射映像記録と解釈断面図を示し、図 4.2, 4.3 に測線Bの反射映像記録と解釈断面を示す。各図の横軸は距離(m)、縦軸は深度(m)とした。

※ 深度：先に記したように、反射映像は時間断面として記録される。これを深度に変換するには、媒体の誘電率を仮定し、深度に変換する。

今回は媒体の誘電率 $[\epsilon \gamma]$ を $\epsilon \gamma = 9$ とし、伝播速度を $10 \times 10^7 \text{m/s}$ とした。

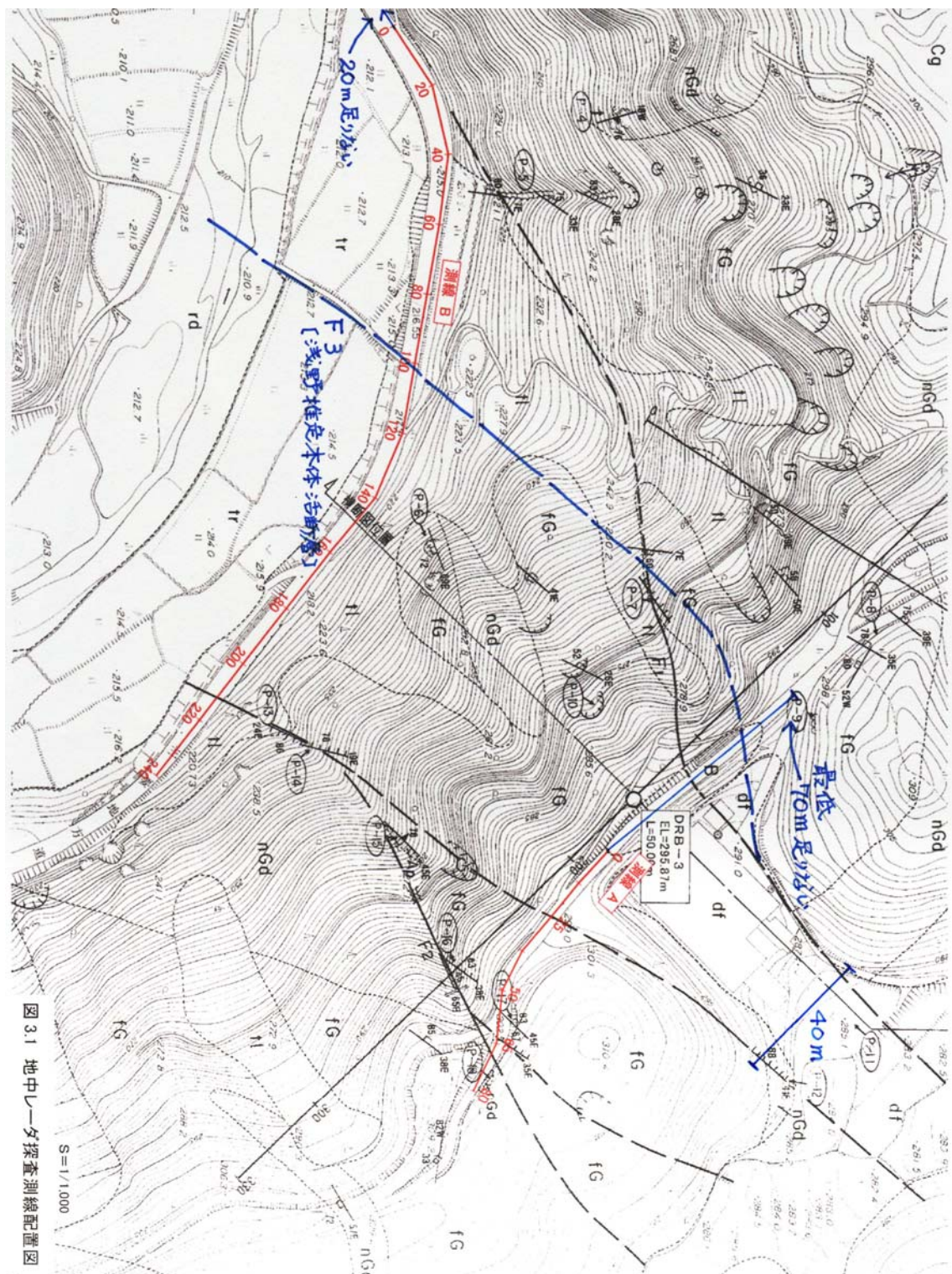
淡水飽和粘土： $\epsilon \gamma = 8 \sim 12$

アスファルト舗装+土： $\epsilon \gamma = 12$

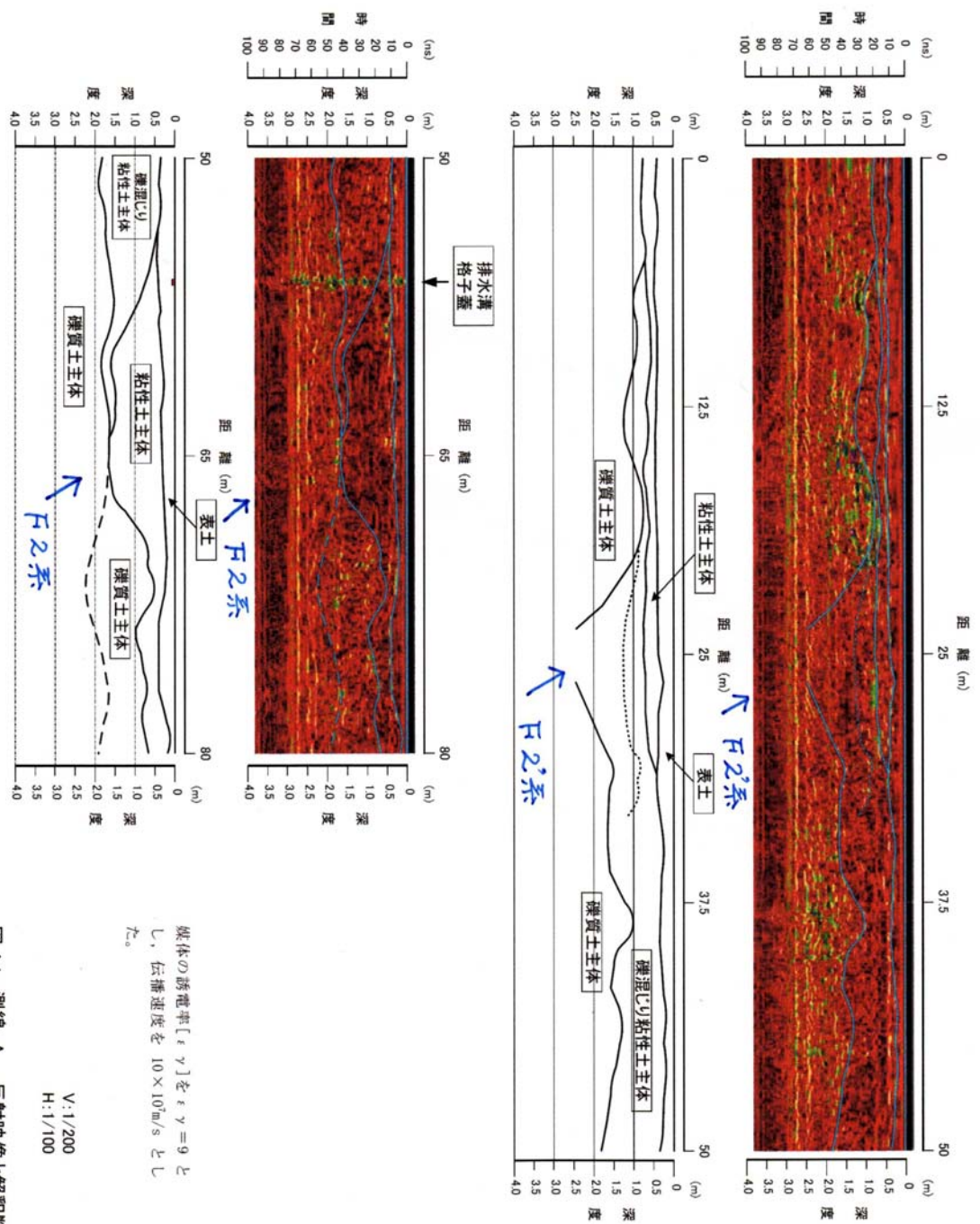
測線Aでは、断層(F2)が想定される 25m 付近と 65m 付近に断層と解釈される地質構造を捉えることはできなかった。

測線Bについても 200～220m 間に、断層と解釈される地質構造を捉えることはできなかった。

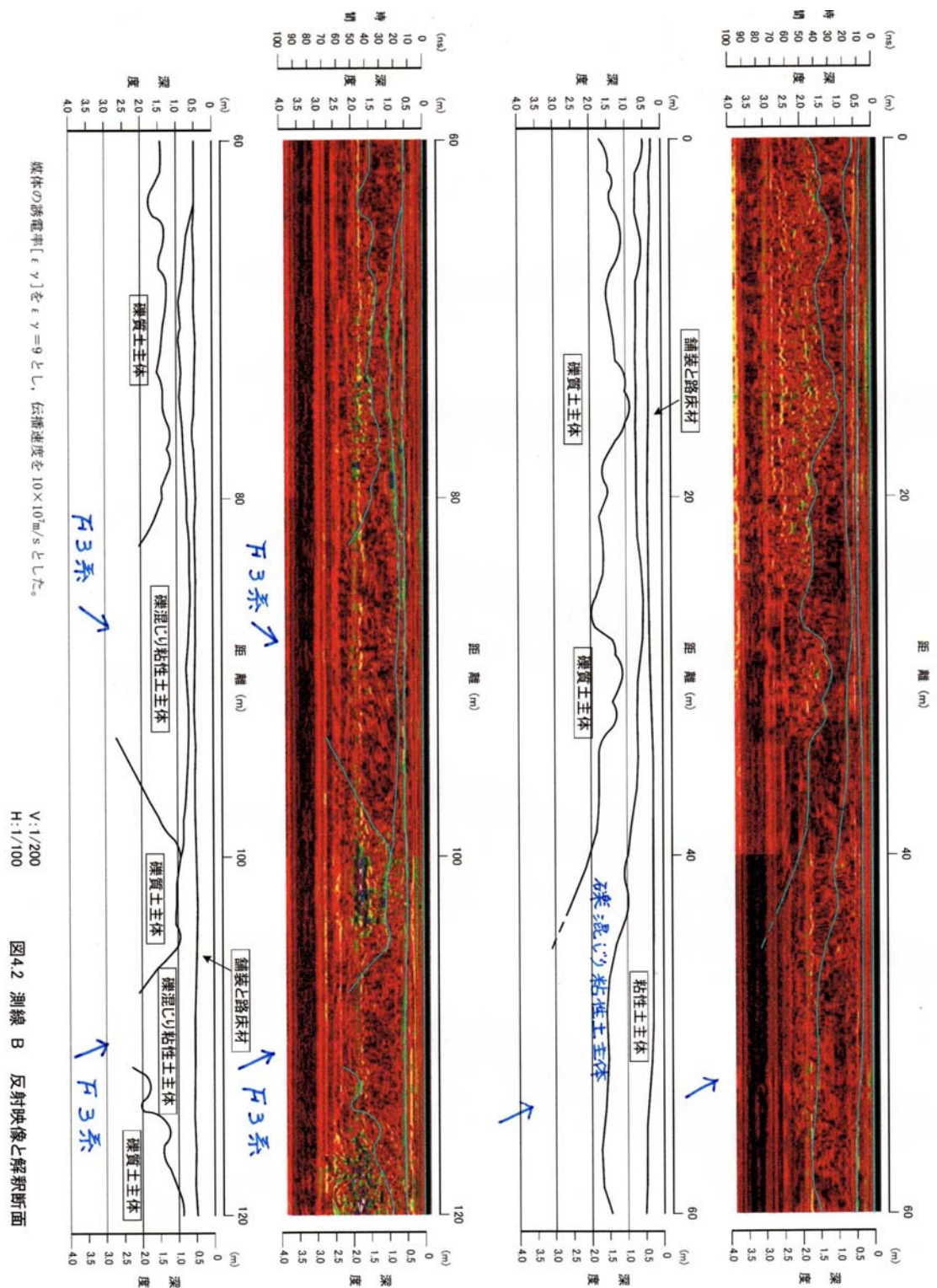
〔 地中レーダ探査 測線配置図 〕



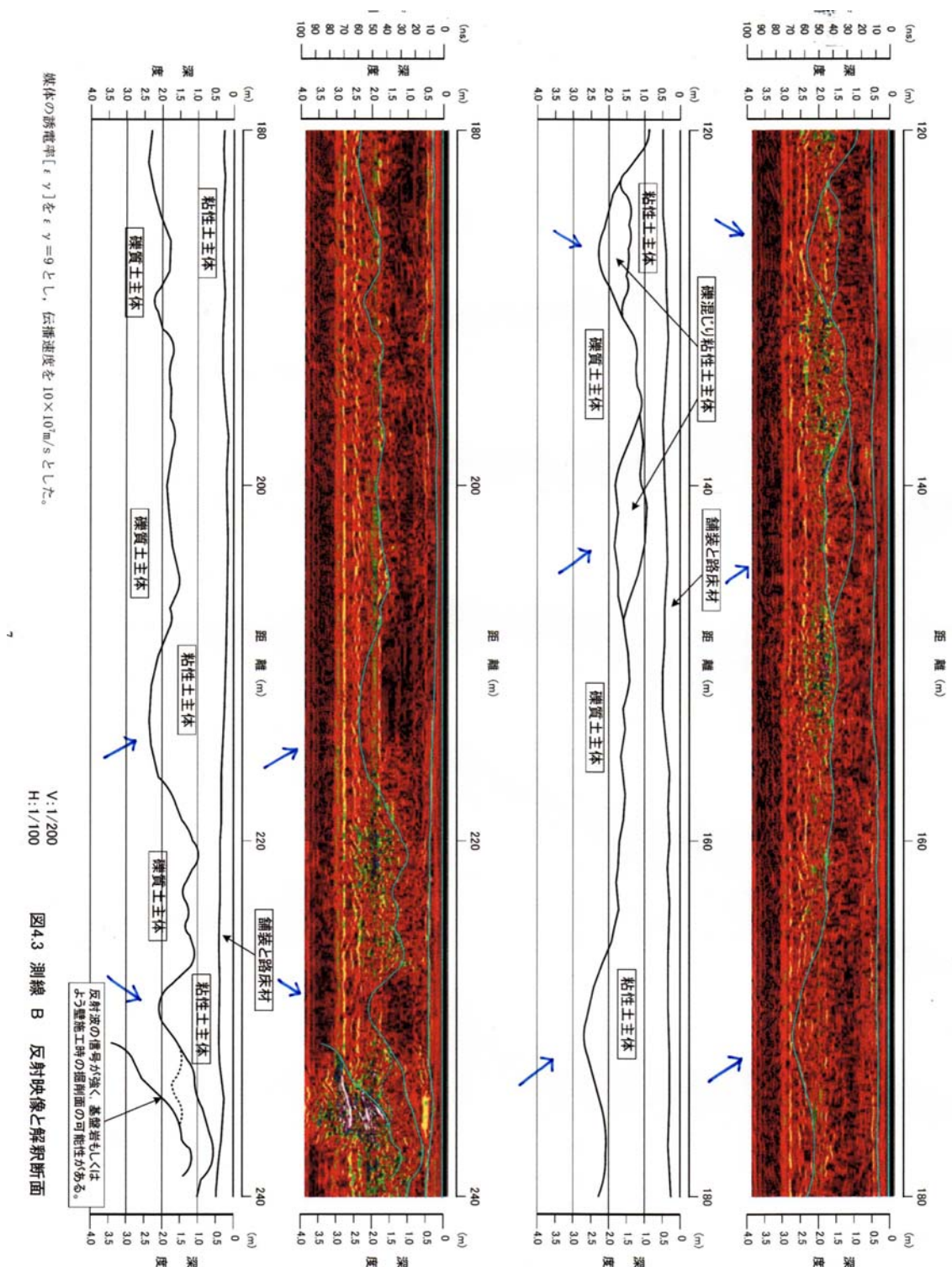
〔 測線 A 反射映像と解釈断面 〕



[測線 B (0-120m) 反射映像と解釈断面]



〔 測線 B (120-240m) 反射映像と解釈断面 〕



〔 注意: 以上の画像は、川上ダム建設所が2008年9月26日からホームページ上に公開したもので、説明を分かりやすくする為、一部に筆者が青色のペンにて加筆を行なっている。〕

〔 批判と解説 〕

筆者は、「川上ダム活断層確認現地検討会」実施に向けて、水資源機構 川上ダム建設所と10数回の「協議・文書交換」を行い、委員会審議の一環として「真実の解明」が為されるよう努力して来たが、「隠蔽」を基礎としてマトモな「地質立会い調査」が拒まれて来た経緯がある。

この「地中レーダ探査」は筆者より要求したものの、「立会い調査」を最後まで拒否されたものである。今回、内容を見ると懸念していたように、筆者が求めていた範囲でやっておらず、特に測線A側が70m以上外されてしまっている。この部分はF1断層のみならず、破碎幅15～20mの大断層F3が通っているのである。この事実が表れるのを避けたとしか思えない。鞍部北側の40mをやらなかった事も、それを避ける意図が明確である。

測線Bにおいても、F1断層の走向から判断し、県道下に断層部分が現れるのはまだ先の地点である可能性が高い。20mほど測線を伸ばさなくてはならないのである。

〔 測線A 反射映像と解釈断面 〕に青ペンで記入しているように、距離25m付近は明らかに断層を示す構造である。露頭断層からも判断されており、後で示す「平成19年度右岸鞍部低速度帯地質調査業務報告書」の地質平面図でも、それまでの「推定走行線」でなく「实在断層線」として実線で描いている。反射映像も礫混じり粘性土が礫質土を突き抜いており、紛れもなく断層構造である。65m付近についても上層が粘性土主体ではあるが、アンテナセンサーが横に重なる映像を映しており、ここにも断層構造が存在する可能性が高い。

〔 測線B 反射映像と解釈断面 〕にも青ペンで記入している。50m付近は礫混じり粘性土が大きな幅で落ち込みを見せている。また、83～95m付近の大きな幅の礫混じり粘性土の落ち込みは、確実にF3断層の破碎部を示している。110m付近も5mほどの断層破碎部と見なければならない。それ以外の測線距離のものについても、矢印をつけた部分は明確ではないが、断層構造である可能性は棄てられないと見る。

調査結果なるものが、筆者が指摘している明確な「断層構造」に触れず、馬鹿げた「断層と解釈される地質構造を捉えることはでき(な)かった。」と言っているのは、実際は「日本物理探鉱(株)」技術者の言葉ではなからう！特に、測線Bについて、「200～220m間に、断層と解釈される地質構造を捉えることはでき(な)かった。」とだけしか記述する訳はなく、この「調査結果」文は「捏造」されたものではないか！

この後のページは参考として、「平成19年度 右岸鞍部地質平面図」と

「露頭断層の観察表」を示す。

〔 参考:平成19年度 右岸鞍部低速度帯地質調査業務報告書 地質平面図 〕



〔 LOC. 2 断層露頭観察表 〕

露 頭 観 察 表				
位置	三重県伊賀市阿保字桐ノ木地内 B-2孔から東20m付近の斜面			地点番号 Loc. 2
標高	286~288m	露頭形態	断層・ <u>変質帯</u> ・一般(岩盤・堆積物)	対応する線状模様
断 層 破 砕 等 の 性 状				
区分	種別	走向/傾斜	性 状 (破砕幅、構成材料、色調など)	
主要な もの	断層	①N26E, 86NW	幅30~35cm, 白色粘土(一部黄色)に細~中粒の有色鉱物(主に	
		②N30E, 84NW	黒雲母)が見られる。	
副次的な もの				
性状区分	cl:粘土, clb:角礫混じり粘土, fbr:粘土混じり小角礫, mbr:粘土混じり中角礫, lbr:粘土混じり大角礫 s:砂, fbr:小角礫, mbr:中角礫, lbr:大角礫 (fbr=2~20mm, mbr=1~10cm, lbr=10cm以上), sf:軟質化			
固結度	未固結(U)・ <u>半固結(M)</u> ・固結(C)	被覆層との関係	被覆層が 有る・ <u>無い</u>	被覆層は断層によって切られて いる・いない
露頭スケッチ、写真 (走向値は偏角補正済み)				
(露頭スケッチ)				
(露頭写真)				

図-4.11.2 LOC. 2 断層露頭観察表